



TITLE:

金數量説に就いて(下)「特にカッセル説を中心として」

AUTHOR(S):

松岡, 孝兒

CITATION:

松岡, 孝兒. 金數量説に就いて(下)「特にカッセル説を中心として」. 經濟論叢 1931, 33(5): 741-752

ISSUE DATE:

1931-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130100>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 五 第

卷三十三第

行發日一月一十年六和昭

論 叢

景氣徵候論について

魚食論

英國の重農主義者

時 論

赤字財政と對策

平價切下論を駁す

研 究

カッセル教授の貨幣數量説の實證の吟味

獨逸大銀行と中小工業金融

金數量説に就いて

說 苑

ケインズの基本的均衡關係

世帯統計に就て

貸借對照表の基礎的考察

老齡船の處分に就いて

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

文學博士 高田 保馬

法學博士 財部 靜治

經濟學博士 堀 經夫

法學博士 神戸 正雄

經濟學博士 汐見 三郎

經濟學士 柴田 敬

經濟學士 楠見 一正

經濟學士 松岡 孝兒

經濟學士 中谷 實

經濟學士 岡崎 文規

經濟學士 熊本 吉郎

經濟學士 佐波 宣平

金數量説に就いて (下)

「特にカッセル説を中心として」

松岡孝兒

四、金數量説機構上の特色並に其の批判

以上私は、金數量説の意義並に其の内容に就いて述べた。以下更に、此等上述の諸點より、謂はゆる金數量説機構上の特色をば問題とし、之が説明並に批判をば試みるであらう。がここでも我々は、専らカッセルの意見を中心とする。

彼の謂ふところを綜合すれば、²⁸⁾金數量説機構上の特色とするところは、事實上に於ける金分量と一般物價水準とをば直接比較上の問題とせず、²⁹⁾事實上に於ける金分量の特定の變動が、一般物價水準を支配するものであるとする點である。更に立ち入つて之に説明を加へやう。凡そ彼の謂はゆる事實上の金分量の特定の變動なるものが、一般物價水準に及ぼす作用を考察するには、一定の前提が必要であり、この認められた前提の上に彼の金數量説なるものは成立する。即ち特定の變動といふのは、かくの如き事實上に於ける金分量と一般物價水準とをば直接比較しないといふのみでない。そこには積極的に金分量に關して特種なる考方が加へられてゐるといふことである。然らばそれは如何なる考方であるか？凡そ一定の考察期間に於いては、一般經濟の發達は、次第

28) Cassel: Theoretische Sozialökonomie 1923, pp. 417-424 (大野信三譯 pp. 695-706); League of Nations, Interim Report, pp. 75-78.

29) 例へば Levasseur; La question de l'or 1858 又は Nogaro; La question de l'or (Revue d'E. P. 45e Année, no. 1)の如き

に増加する金分量を必要とするものであるが、此の場合、一般物價水準變動の原因として此くの如き一定の金分量の増加を以て、直に之に充てることはできない、そこには金分量に關する特定の考方、即ち一般物價水準を支配するものは、一定期間に於いて考へられる金の正常在高に對する事實上の在高の示す偏差であるとするものである。

併しかくの如き考方には、二つの基礎事實が前提とされてゐることは之を見逃すことはできない。一は考察期間の前後に於ける一般物價水準に關する事實であり、も一つは考察期間に於ける事實上の金分量は一般經濟の發達に一致するといふことに關する事實である。以下此等二つの事實に論及しやう。

惟ふに、若し考察期間の前後に於いて一般物價水準が同一であるとすれば、即ち考察期間の始めと終りとに於いて、一般物價水準が同一の高さなるが如き時を求め得るとするならば、上述せる金分量に關する特種なる考方の成立に、極めて有利である、何となれば、斯くの如き場合に於いては、金分量の増加は、考察期間の始めと終りとに於ける一般物價水準に對し、何等の影響をも及ぼさなかつたといふこと、従つて其の金分量の増加は、全然其の期間に於ける一般經濟の發達に缺くべからざるものであつたと考へられるからである。

更に考察期間に於ける事實上の金分量の増加と一般經濟の發達との一致に關し、即ち具體的事實としての金分量の増加率、並に一般經濟の發達割合については、如何に之を考察してゐるか？ カッセルの金分量増加率は、著聞せる彼の謂はゆる年平均三パーセント増加説中に含まれてゐる。

私は已に他の機會に於いて、若干異なる視角から、之に觸れたのであるが、今更に説明の順序上より見て、簡單に彼の謂はゆる年平均三パーセント増加説の要領を述べることにする。此の計算は、金の生産額が一八五〇年に於いて百億マークであり、一九一〇年に於いて五百二十億マークに達したことから出發して、事實上の金分量は、一八五〇年乃至一九一〇年の六十年間に、五・二倍に達してゐるから、此の増加を六十年に對し割りあてるときは、 $\frac{52}{100} = 1.0279$ 即ち一・七九パーセントとなり、大凡二・八パーセントに相當することを示す。換言すればこのことは、金分量が一八五〇年以來、年々二・八パーセントづゝ増加したとすれば、一九一〇年までには五・二倍に達したであらうことを意味するものである。此の率に對し、レキシスの算定せる年平均減耗率〇・二パーセントを加へるときは、ここに金生産額増加に關し、年平均三パーセント説なるものが成立するに至るとするものである。

以上の如き金分量の増加率に對して、カッセルは、一般經濟の發達率に關し如何なる考を有つてゐるか？此の點に關し、私の見る限りに於いては、彼は二つの方法を示してゐる。第一は直接評價に依る方法であり、第二は間接評價に依る方法である。換言すれば、前者は、商品生産より直接算定せるものであり、後者は、金産額を通じて間接に推定せるものである。私は論述の順序上、更に此等の點にも論及するであらう。

先づ直接評價法なるものは、カッセルに依ると、また二つに分れる。一は其の評價に「重み」を附したものであり、も一つは之に「重み」を附せざるものである。第一の方法によると、一八五〇

年乃至一九〇七年間に於ける銑鐵の世界生産高増加率を求め、之をば四・二パーセントとし、更に之に對して農産物の増加率は遙に低く、之をば一・二パーセントとする。今、社會的所得の分配に於いて、食料品に用ひられるものが總額の三分の一であり、工業品に用ひられるものが總額の三分の二を占めるとすれば、一般經濟の平均發展率は、三・二パーセントとなるといふのである。第二の方法は、以上の場合、食料品たると工業品たるとに依つて「重み」を附せず、之をば同等に取扱ふものであつて、これによれば其の割合は、二・七パーセントとなるとするものである。以上二つの場合とも其の結果より判斷するときは、一般經濟の發達率は、大體に於いて約三パーセントを基準として考へることの可能性あることを示すものであるとかうカッセルは謂つてゐる。³¹⁾

併しカッセルの主張の重點は、かくの如き直接評價法よりも、むしろ次に述べる間接評價法にあるものゝ如くである。之によれば、彼は、前に述べた世界の金分量が、一八五〇年乃至一九一〇年間に於いて、平均年二・八パーセントづゝ増加した點より出發し、更に此等兩年に於いて、一般物價水準は、已に述べたるが如く、何れも相等しいといふ點から論じて、之により一八五〇年乃至一九一〇年間に於ける金在高の増加は、其間經濟的發展が認められるとしても、一九一〇年の一般物價水準をして一八五〇年と同一水準に維持するため、必要にして且つ十分なるものであつたことを結論し得るものであるとし、³²⁾これより、一八五〇年乃至一九一〇年間の一般經濟の發展は、大體、金の増加に應じて比例的に増加せるものなることを理解し得るものであると論じてゐる。³³⁾

31) Cassel; Supply and Demand (League of Nations: Interim Report. p. 74)

32) Cassel: op. cit. p. 74.

33) Cassel: Theoretische Sozialökonomie 1923. p. 403. (大野信三譯 p. 673)

以上はカッセルの考へたる前提、即ち金分量に對する一の特定なる變動に關する考方の基礎事實である。ともかく、そこでは、一定期間に於ける金生産の増加、之に伴ふ一般經濟の發展、之に對して考察期間の前後に於ける一般物價水準の同一てふ事實が基礎的に要求されてゐる。かくして彼の金數量説のモンタージュは始まる。

カッセルは、かくの如く、一定期間後に於いても、一般物價水準を變化せしめない金分量の増加をば、該期間に於ける金分量の正常的増加 (Normalzuwachs der Goldmenge) と呼び、尙又此の正常的増加 (Normalzuwachs) なる假定の下に於いて、其の期間中任意の時點に存在すべき筈の金分量をば、正常的金分量 (Normale Goldmenge) と呼び、かくの如き見方に基づき、一八五〇年乃至一九一〇年の期間に於いて、一八五〇年の百億マークを基準として二・八パーセントなる年々の均等増加率による計算を行ふときは、ここに同期間に於ける正常的金分量の系列が得られると論じてゐる。次の第三表中の第三項並に第二圖實線は右の素材事實を語るものである。

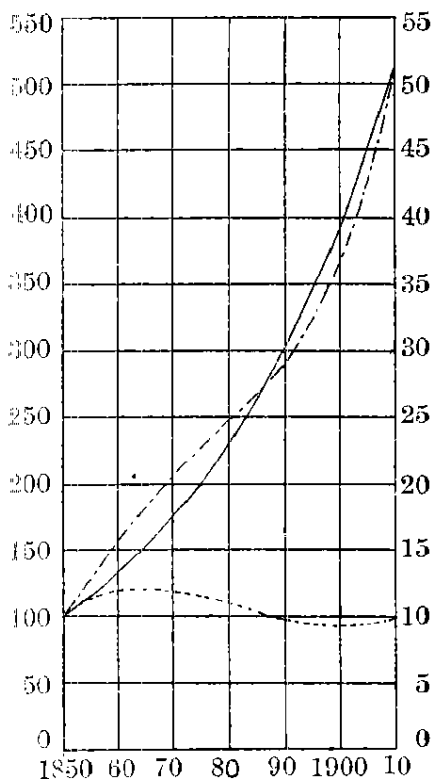
第二表 世界金在高表

年末	金現實高 在 (百萬マ ルク)	金正常高 在 (百萬マ ルク)	金相對 的在高
1850	10,000	10,000	1.00
1855	12,680	11,470	1.11
1860	15,370	13,160	1.17
1865	17,795	15,100	1.18
1870	20,375	17,320	1.17
1875	22,555	19,880	1.13
1876	22,973	20,435	1.12
1877	23,428	21,005	1.12
1878	23,900	21,591	1.11
1879	24,319	22,193	1.10
1880	24,735	22,800	1.08
1881	25,146	23,448	1.07
1882	25,525	24,102	1.06
1883	25,884	24,774	1.04
1884	26,272	25,465	1.03
1885	26,650	26,160	1.02
1886	27,046	26,890	1.01
1887	27,433	27,640	0.99
1888	27,836	28,411	0.98
1889	28,272	29,204	0.97
1890	28,775	30,010	0.96
1891	29,266	30,847	0.95
1892	29,823	31,708	0.94
1893	30,424	32,593	0.93
1894	31,124	33,502	0.93
1895	31,885	34,430	0.93
1896	32,670	35,391	0.92
1897	33,595	36,378	0.92
1898	34,733	37,392	0.93
1899	35,951	38,435	0.94
1900	36,957	39,510	0.94
1901	37,970	40,612	0.93
1902	39,140	41,745	0.94
1903	40,438	42,910	0.94
1904	41,815	44,107	0.95
1905	43,366	45,320	0.96
1906	44,970	46,584	0.97
1907	46,614	47,884	0.97
1908	48,381	49,220	0.98
1909	50,192	50,593	0.99
1910	52,000	52,000	1.00

34) League of Nations: Interim Report, p. 77.

35) League of Nations: op. cit. p. 78; Cassel: Theoretische Sozialökonomie, 1923, p. 417.

第二圖、世界金供給圖



— · — · — 事實曲線
 ————— 正常曲線
 相對曲線

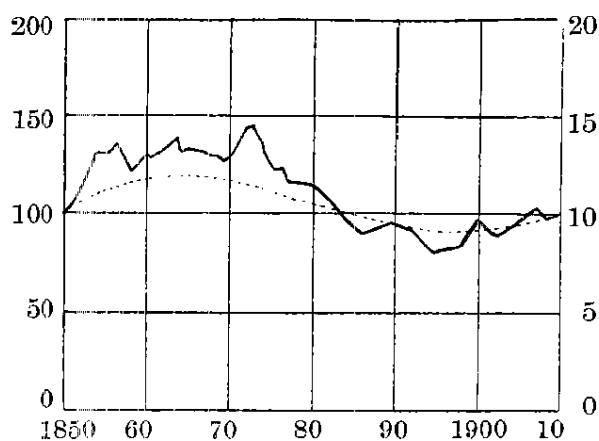
カッセルは斯くの如き説明の意味するところを論じ、之を以て一八五〇年乃至一九一〇年の期間に於ける一般物價水準 (Allgemeines Preisniveau) の變化を

ば、金分量 (Goldmenge) の變化に歸し得るとする限り、此の一般物價水準なるものは、之を以て、金の事實上の分量 (Faktische Goldmenge) の正常的金分量 (Normale Goldmenge) に對する偏差に關聯せしめることができるものであるとし、更に從つて若し、一八五〇年乃至一九一〇年の期間に於ける年平均二・八パーセントの金分量の増加ありたる年の金分量をば、正常的金分量 (Normale Goldmenge) と見做すとすれば、事實上の金分量 (Faktische Goldmenge) が正常的金分量 (Normale Goldmenge) に對して惹き起す偏差は、何れも其の程度に應じて、一般物價水準の變化と共通なる傾向をとつてゐることを示して居り、之を以て、一般物價水準に於ける變動の原因であると解するを以て妥當なりと斷定してゐる。次の第三圖は即ちこれである。³⁶⁾

カッセルは更に説明を進め、第三圖への一覽に依つて、金の相對的分量が、一般物價水準の變化と相當近似的な變化を示すものなることは、容易に理解し得るところであると謂つてゐるが、

36) Cassel: op. cit. p. 421.; League of Nations; Interim Report. p. 78.

第三圖
一般物價水準と金の相對的分量



實線は一般物價水準
點線は金の相對的分量即ち金の事實上の分量と正常的分量との比

たことであり、僅に其の後、正常的金分量なる觀念が確立するに至り、ここに一般物價水準が金供給に依存する關係が、一定の内容を有ち、また同時に、正當に事實に依る材料に基づき解決が示されるに至つたものであると結論してゐる。³⁸⁾

かくの如きカッセルの所論に依れば、カッセルの金數量説の機構上に於ける特色は、一般物價水準に對する金の支配的影響の實證的研究をば、其の求めた金分量及び一般物價水準より直接に之を求めず、先づ一八五〇年乃至一九一〇年間に於ける相對的金分量の變動 (Veränderung der relativen Goldmenge) が、一般物價水準 (Allgemeines Preisniveau) の變動を決定するものであること

唯しかし、一般物價水準には已に述べたるが如く、長期的なものと短期的なものとの二種類があり、此の際此の問題に關係あるのは、長期的なもののみであるとして、短期的なものを不問に附し、³⁷⁾ かくてかくの如き論點を綜合して、今一八五〇年乃至一九一〇年の期間を見ると、金の相對的分量の變動なるものは、從來の如く、一般物價水準と金の供給とを比較し、金分量の過不足に關して求められた不確定な判斷を以て

満足せる時代に於いては、全然考へ及ばなかつ

37) Aftalion も亦同様の意見を述べてゐる。[Aftalion; Les causes et les effets des mouvements d'or vers la France (Société des Nations; Documents sélectionnés sur la distribution de l'or)]
38) Cassel; op. cit pp. 416-426 (大野信三譯 pp. 693-706)

を論じてゐるものであり、謂はゆる事實上の金産高 (Taktische Goldproduktion) が、二・八パーセントなる平均増加率に依つて求められた正常生産高に對する偏差を以て、一般物價水準の變動を決定する原因であると見るものである。

斯くの如き主張に於いて、カッセルは、先づ何が故に一八五〇年乃至一九一〇年といふ期間を選定せるかに就いて問題を提供するものであるが、此の主張は上述せる金數量説の内容中、サウエルバック・ステイスト卸賣物價指數の項に於いて述べたところであり、之に對する批判も亦、私は已に他の機會に於いて觸れたところである。ゆゑにここでは、重ねて贅しない。

次に問題となるのは、カッセルは何が故に金の正常生産高に對する事實上の生産高の示す偏差即ち金の相對的分量をば、一般物價水準中長期的變動に對して比較したかといふ點である。換言すれば、何が故に、彼はかくの如き金分量の相對的變動をば、一般物價水準中長期的變動に對して比較したかといふ點である。

此の點は、統計方法論的に見るときは、種々の問題を提供するものであるが、今此の方面に就いては觸れない。唯かくの如き比較を認めたことは、金の生産高なるものが、從來の金蓄積總量に比して小なるものであるから、問題とする必要がないと謂つて之を輕視せんとする見方に從はず、更に其の見方を沈潜せしめ、ここに金分量の相對的變動なるものを求めて、之をば長期的一般物價水準に對して比較し、以て之により一定の因果關係を成立せしめるに至つたものであつて、これにより從來此の方面に於ける研究の結果が、徒に副詞的形容詞的字句の堆積なりしものを、嚴

39) 拙稿；金問題批判(經濟論叢第三十三卷第二號 pp. 150-151. 参照)尙ほ此の點最後に餘言として補ふ

40) 例へば Nogaro の如き

密に數量化せんとする一の試みである。そして實際も亦興味ある結果を示してゐる。同様の見方は、キチンに依り貨幣金及び英蘭銀行割引率に就いて行はれてゐるが、併しそれには已に述べたるが如く、一定の假定があることを忘れてはいけない。窮極するところ、それは一の Definitionsfrage であることは注意すべきことである。特に一の期間の始めと終りとに於いて、一般物價水準が同一であるからといふ單なる事實より、當該期間に於いて、一般經濟の發達が金分量の増加に伴ふとするが如きことは、必ずしも之を肯定し得ない。それは示唆的であるが省察不十分たるを免れない。蓋し一般經濟の發達即ち一般取引の増加に關する動態的研究には、人口の増加、技術の進歩等々の他の有力なる原因が考へられるからである。

最後に、相對的金分量の變動なるものが有つ意味に關して、カッセルと異なる視角より見たものに、アフタリオンのそれがある。

彼の考ふところによれば、「貨幣の流通速度は一定不變なるものであるとは考へられない。それは、規則的な循環的變動並に長期的變動を示すものである。」⁴²⁾「今流通速度の長期的變動に於いて、循環的變動を消去するときは、一八五〇年乃至一九一四年間に於いて、一八五〇年より一八七三年、一八九六年より一九一四年に至る長期的物價騰貴期間に於ける流通速度の増加、並に一八七三年より一八九六年に至る長期的物價下落期間に於ける流通速度の減少は、かくの如きカッセルの示唆せるもの、即ち事實上の金分量の正常的金分量に對する偏差に應ずるものではないだらうか⁴¹⁾」と述べてゐる。

41) Kitchin, J; L'offre d'or comparée avec le prix des denrées. (Société des Nations: Rapport provisoire de la Delegation de l'or, p. 88)

42) Aftalion; Monnaie, prix. et change, Paris 1927. pp. 180-181

これによれば、若し一般物價の長期的變動に於ける騰貴期間に一般物價水準が金生産の増加以上に昇るときは、また若し之と反對なる下落期間に一般物價水準が金生産の減少以上に下るときは、このことは、金の生産上の變動より大なる變動あることを示すものであつて、即ちそれは貨幣の流通速度の長期的變動の存在するものであることを意味するものではないかといふにある。

此の點への着眼は、極めて興味あるものである。蓋し既に述べたるが如く、カッセルに於ける金數量説は、假定により $PT \parallel MV$ に於いて、 V なる要素を無視してゐるからである。従つて形式的に云へばアフタリオンの考へは成立する。併しアフタリオンの求めて以て主張するものは、カッセルの實證的研究と其の材料を異にして居り、フランスに於ける資料によるものである。従つて其の肯定には尙ほ幾多の考證と吟味とを必要とするものでありにはかに斷定し難い。

結 言

以上之を要するに、金數量説なるものは、カッセル説の如く、専ら金分量に依るものたる、金委員會其他の人々の説の如く、貨幣金分量に依るものたるを問はず、すべて之を以て一般物價水準との關係に明瞭にして必然的な説明を與へ得るとするものであり、更に金又は貨幣金の分量に於ける特定なる變動を以て、凡ゆる商品の價格に對し、單一要素として作用する決定的原因と解するものであるが、かくの如き觀念は、一般的には之を認めることはできない。それは金と物價との問題に關する限り飽くまでも一面的である。

- 43) Aftalion; Les causes et les effets des mouvements d'or vers la France. (Société des Nations; Documents sélectionnés sur la distribution de l'or p. 11.)
44) Aftalion; Monnaie, prix et change, Paris. 1927 pp. 180-181.

特に之を主張する人々に於いては、先驗的に金の一般物價水準に對する支配といふ見方を有するものであり、更には、最近に於けるが如く、一般物價水準の下落現象あるに際し、それが對策を必要とする實踐的要求が、其等の人々をして金又は貨幣金の増加を必要とする上に於いて、成し得る限り、かくの如き考方の存在を主張することは當然である。また此の點から見れば、金委員會の意見は、カッセルの意見よりも明瞭であり、究極的でもある。

併し、結局此等兩者の關係は、五十歩百歩である。蓋し一般物價水準の變動は、動態的に見るとき、凡ゆるものに於いて平均的一般的には起り得ない。一般物價水準變動は、各商品市場に於いて先づ起るとする見方が實際である。従つて、金又は貨幣金の變化を以て、一般商品に對し、必然的に且つ平均的に作用する究極原因であるとする考には承服し難いからである。

勿論、之を以て、金又は貨幣金の分量が、全然一般物價水準に影響するが如きことはあり得ないとするものではない。特定なる場合、例へば金が商品に對して異常なる増加を示すが如き場合には、一應、數量說的説明を成立せしめる。併し此の場合に於いても、變動の事實は、各商品市場に於いて起る。もし金分量に關し、如上の如き異常増加が行はれないとするとときに於いては、到底數量說的説明の成立は困難であり、ここに金數量説の面する難關が聳える。

是に由つて之を觀れば、金と一般物價水準との關係に於いて、金數量説なる觀念は、必ずしも現代の金と一般物價水準との問題を解決する鎖鑰的理論ではない。その重要性は、決して、全面的なものではなく、一面的な金融資本家的實踐要求によつて、金委員會其他の人々の支持すると

ころのものである。

寔にマッケンナも謂へる如く、現世紀は、前世紀の工業時代に對して貨幣時代である。恐らくは如上の主張を待つまでもなく、貨幣に關する理論問題は過去に於けるよりも一層強き姿に於いて、現世紀を支配するであらう。

餘言

以上私は、カッセルを中心とする金數量説に就いて述べたが、斷つて置くことは其對象期間に關してである。

カッセルの金數量説が、其の根本的主張をなすのは、専ら一八五〇年乃至一九一〇年間についてである。従つて私も亦専ら此の期間を對象として論述を試みた。此の期間以外に於いては、彼の主張の根據は頗る薄弱である。殊に一九一〇年後に於いて、貨幣金の相對的變化が一般物價水準の變動に對して、甚だしく不一致を示せることは、キチンの示す通りである。³⁸⁾尤も此くの如き異常の原因は、主として外國爲替相場の變動によつたものであるといふことも、注意すべき點である。³⁹⁾更に一八〇〇年乃至一八五〇年の期間に對して、一八五〇年乃至一九一〇年間の金増加率二・八パーセントを適用せるカッセルの考は、私忒的である。此の間増加率は、僅に・〇五五パーセントに過ぎないと謂はれてゐる。⁴⁰⁾斯くの如き點に於いて、素より統計的結果には興味あるものなしとは謂はないが、其の適用方法には反省すべき多くの點を含むと考ふるものである。(完)

- 38) Kitchin; The Supply of Gold compared with Prices of Commodities (League of Nations; Interim Report p. 85.)
39) Aftalion; Monnaie, prix et change. p. 69. et suiv.; Nogaro; La monnaie et les phénomènes monétaires contemporains. p. 197.
40) Nogaro; La question de l'or (Revue d'économie politique, 45e Année, No. 1. p. 26.)